Y. HAYAKAWA, H. KAGA: A report of survey
concerning to the states of the uses of
public sports facilities in Nagoya City
—Especially, on the public base-ball grounds—

名古屋市における社会体育施設 利用の実態調査

——特に公共野球場について——

南山大学 早 川 洋 一
日本福祉大学 加 賀 秀 雄

1. はし が き

戦後 10 数年を経た今日、社会体育のあり方がようやく国民の体育をどう考え、どう実践して行くべきかという方向で論議されるようになってきた。いうまでもなく、このような論議の背景には、社会体育を国民全体の体育にまで高めて行こうとする考え方が貫かれてあることを否定することはできない。

だが、今日の社会体育における一般的な傾向として、必ずしも、そのような考え方が、実践的な運動にまで高められているとはいえない現状のようである。

本調査では、このような社会体育の現状を名古屋市における公共社会体育施設の実態とその利用の状態を分析して行く中で、若干なりとも明らかにし、その上に立つて、社会体育を国民の体育にまで高めて行く上に、どのような課題をわれわれがになつているのかという点に視点をしばつて考察を進めていきたい。

2. 調査の目的

本調査の目的は名古屋市における公共社会体育施設が、その利用主体である市民とどのように結合し、また、それが国民の体育を志

向する方向の中で、いかなる問題をはらんでいるのかという点を明らかにし、あわせて、それに対する方策を検討する段階にまで発展させて考察を進めて行こうとするところにある。

特に、今回は名古屋市内の全公共野球場について報告する。

3. 調査の方法

調査にあたつては、愛知県並びに名古屋市教育委員会体育課の協力を得て、名古屋市内の全公共社会体育施設について、体育施設管理事務所から、それぞれ資料（体育施設借用願）を提出してもらい、それにもとづいて調査を実施した。

調査の時期は昭和 35 年 4 月より 36 年 3 月に至る 1 カ年間である。

また、調査の内容は、(1) 利用主体、(2) 利用日時（月・日・曜日・時間）、(3) 利用目的 等である。

更に調査の対象となつた野球場は次の 16 球場である。

○熱田神宮野球場	○大幸野球場
○熱田神宮球技場	○稲葉地野球場
○瑞穂野球場	○六反野球場

表1 野 球 場 別 月 別 利 用 回 数

年月 野球場名	35年 4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	36年 1月	2月	3月	計	備 考
神宮野球場	23	22	25	25	30	27	31	22	2	5	1	10	223	公認野球場(県立)
神宮球技場	64	64	72	71	83	62	56	58	10	2	28	65	635	2カ所使用可能
瑞穂球場	19	23	16	20	20	20	23	24	6	0	5	16	192	公認野球場(市立)
名城球場	119	198	189	163	168	155	176	113	21	17	73	253	1645	6カ所使用可能
志賀球場	17	30	34	32	21	22	30	19	2	2	9	24	242	
押切球場	48	52	41	50	36	36	45	37	6	7	17	52	427	2カ所使用可能
庄内球場	9	10	5	8	2	10	9	8	2	0	4	8	75	
葵球場	12	22	26	27	16	21	21	12	0	1	3	15	176	
大幸球場	20	22	25	31	24	23	34	19	1	0	1	27	227	2カ所使用可能
稲葉地球場	28	28	35	35	24	22	28	21	15	7	14	29	286	
六反球場	38	33	34	37	35	22	15	18	5	0	28	29	294	
松葉球場	16	16	15	29	36	12	14	12	1	1	6	17	175	
道德球場	18	32	33	20	20	20	23	18	2	4	5	24	219	
呼統球場	22	25	27	31	30	26	17	18	3	4	11	32	246	
港陽球場	16	18	20	23	16	18	18	6	3	0	4	8	150	
港北球場	26	29	25	21	29	31	14	23	6	1	9	33	247	
計	495	624	622	623	590	527	554	428	85	51	218	642	5459	
%	9.1	11.4	11.4	11.4	10.8	9.7	10.0	7.9	1.6	0.9	4.0	11.8		

○名城野球場
○志賀野球場
○押切野球場
○庄内野球場
○葵野球場

○松葉野球場
○道德野球場
○呼統野球場
○港陽野球場
○港北野球場

4. 結果の考察

1. 野球場別月別利用回数について

調査結果によれば、表1の如く、最も利用されている月は、3月、5月、6月、7月の4カ月であり、一般にシーズン・オフ(12月~2月)とされている各月の利用は極めて少い。

また、各野球場毎の総利用回数では、顕著な差がみられるが、その理由としては、2球場(神宮・瑞穂野球場)が共に公認野球場であるために、その利用層が限定され、おのずから利用回数も少くなっていること、反面、4球場(神宮球技場・名城・押切・大幸野球場)は1球場で2カ所ないし6カ所利用可能

であるために、利用回数が多くなっていることなどが考えられる。

なお、全野球場の総利用回数のうち、約1.5%がソフトボール、体操、運動会等に利用されている。

2. 野球場別利用区域による利用回数について

表2の如く(市内12区(昭和36年3月現在)中、野球場の設置されていない区は、中区、昭和区、千種区の3区である。

そのうち、中区は野球場が設置されていないにもかかわらず、全野球場を利用しており、全野球場総利用回数の31.7%を占めていて圧倒的に多い。これは中区には、官公庁、事業所等が集中していることによるものと推察される。

他方、千種、昭和の両区は、それぞれ4.2%、2.4%で、その利用率は極めて低い。ただし、千種区の場合、公認野球場である神宮・瑞穂両球場の利用回数が他区に比して最も多い。

表2 野球場別利用区域による利用回数

野球場名	球場 所在区	利用区域 千種区	東区	北区	西区	中村区	中区	昭和区	瑞穂区	熱田区	中川区	港区	南区	その他	計
神宮野球場	熱田区	69	3		6	39	43	20	16	17	1	1	6	2	223
神宮球技場	熱田区	5	2	5	4	48	194	38	9	292	13	6	9	10	635
瑞穂球場	瑞穂区	106	4	2	11	6	32	11	18				2		192
名城球場	北区	20	216	63	130	131	1038	26	2	2	8		4	5	1645
志賀球場	北区	5	29	95	22	12	72	4			3				242
押切球場	西区		10	4	284	63	60			1	5				427
庄内球場	西区	1		6	32	8	26				2				75
葵球場	東区	11	83	24	4	17	31	3		2	1				176
大幸球場	東区	12	79	55	14	14	40	3		7	1			2	227
稲葉地球場	中村区		13		3	177	83		1		9				286
六反球場	中村区	1	8		2	218	46	3	1	2	13				294
松葉球場	中川区					8	12	1		24	130				175
道徳球場	南区					15	12	5	6	51	5	38	87		219
呼続球場	南区					5	12	9	44	18		7	151		246
港陽球場	港区				1	1	10	6		36	13	82	1		150
港北球場	港区	1		3	2	2	20	7		52	17	141	2		247
計		231	447	257	515	764	1731	136	97	504	221	275	262	19	5459
%		4.2	8.2	4.7	9.4	14.0	31.7	2.5	1.8	9.2	4.1	5.0	4.8	3.5	

これは千種区が「愛知県軟式野球連盟」並びに「愛知大学硬式野球連盟」の所在区であることによるものと思われる。

なお、中村区は中区について利用率が高く約14%で全野球場を利用している。

各野球場の利用回数は、その球場の所在区内の利用が最も多い。ただし、神宮野球場と瑞穂野球場については、前記の理由により異なった傾向がみられる。

なお、名城野球場については、その所在区である北区内の利用は余り多くなく、中区よりの利用が圧倒的に多い。この理由としては、中区が北区の隣接区であること、並びに前記の如く官公庁、事業所等が多いにもかかわらず、野球場が設置されていないことにもとづくものと推察される。

また、名古屋市以外よりの利用は約3.5%で極めて少く、名古屋市内からの利用が圧倒的に多くなっている。

3. 年間並びにシーズン中の1日1カ所当りの平均利用率について

表3の如く、日曜・祭日における全野球場の年間1日1カ所当りの平均利用率は91%で極めてその利用度は高い。しかも、シーズン・オフを除けば、その利用率は103%となり、シーズン中は少くとも各球場1カ所で、1日1回以上は利用されているということが窺われる。

これを平日についてみるに、年間では56.8%となり、2日に1回強の割合で利用されていることが分る。なお、シーズン中については、その利用率は約70%で、シーズン・オフに比して、かなり、その利用度は高くなっている。

なお、紙枚の関係上、表として掲載することは出来ないが、個々の野球場についてみるに、日曜、祭日の利用率は志賀、押切、六反、呼続、港北の各野球場については、年間並びにシーズン中、共に100%以上である。また、

表 3 年間並びにシーズン中の1日1カ所
当り平均利用率

休・平日別		日曜・祭日		平 日	
年 月	回数	回数	回数	回数	回数
	回数	回数	回数	回数	回数
35 年 4 月	5 日	151 回	25 日	344 回	
5 月	7	150	24	474	
6 月	4	100	26	522	
7 月	5	119	26	504	
8 月	4	94	27	496	
9 月	5	127	25	400	
10 月	5	124	26	430	
11 月	6	106	24	322	
12 月	4	45	27	40	
36 年 1 月	5	15	26	36	
2 月	4	93	24	125	
3 月	5	164	26	478	
年間の総日数及び総回数		59	1288	306	4171
年間1日1カ所 当り平均利用率		91%		56.8%	
シーズン中の総 日数及び総回数		46	1135	229	3970
シーズン中の1 日1カ所当り平 均利用率		103%		70.4%	

(註) 1. シーズン中とは12, 1, 2月を除いたその他の各月をいう

2. 年間及びシーズン中の1日1カ所当り
平均利用率 = $\frac{\text{総利用回数}}{\text{総日数} \times \text{野球場利用カ所数}} \times 100$

3. 野球場利用カ所数とは野球場数そのものではなく利用されている場所数を意味する

シーズン中についての利用率が100%以上である野球場は、名城、葵、大幸、道徳、港陽の各球場となつている。

以上から、シーズン中においては、16野球場中10野球場が利用率100%以上であることが認められる。

4. 3区分の利用率並びに1回当りの平均利用時間について

午前、午後、全日の3区分の利用率をみてみるに、表4の如くそれぞれ、午前は27.6%、午後は53.4%、全日では19.1%となつており、午後の利用が半数以上を占めている。

表 4 3区分の利用率並びに1回当り
平均利用時間

回数・時間	午 前		午 後		全 日	
	利用回数	時間数合計	利用回数	時間数合計	利用回数	時間数合計
0~2.0	138	275	376	744.5	0	0
2.1~4.0	1352	4820.5	2165	8377	2	7.5
4.1~6.0	15	76	362	1830.5	11	65
6.1~8.0	0	0	12	86	443	3489
8.1~10.0	0	0	0	0	573	5009
10.1~12.0	0	0	0	0	10	111.5
計	1505	5171.5	2915	11038	1039	8682
区分別利用率	27.6%		53.4%		19.1%	
1回当り平均利用時間	3.4時間		3.8時間		8.4時間	

なお、1回当りの平均利用時間をみてみるに、午前では3.4時間、午後では3.8時間、全日では8.4時間となつている。

5. 機関別による利用回数について

ここでは、利用層を (1) 連盟或は協会 (2) 教育機関 (3) 官公庁 (4) 事業所 (5) クラブ (6) その他 に大別し、各利用機関別の年間利用率をみようとした。

その結果は、表5の如く、「事業所」が64.2%を占めて最も利用率が高く、次いで「クラブ」15.9%、「官公庁」10.6%の順である。

次に、個々の利用機関について顕著な傾向がみられるものについてみるに、「連盟或は協会」はその性格上、公認野球場を利用する傾向が強い。従つて、神宮野球場と瑞穂野球場の2球場の利用が多くなつている。

次に、「官公庁」についてみるに、名城野球場の利用が最も多く、次いで六反野球場、神宮球場の順になつている。

「事業所」については、名城野球場が圧倒的に多く、次いで神宮球場、押切野球場、稲葉地野球場の順である。

表 5 機関別による利用回数

利用機関 野球場名	連盟 或は協会	教育 機関	官 公 庁	事 業 所	ク ラ ブ	そ の 他	計
神宮野球場	83	19	14	76	16	15	223
神宮球技場	38	3	70	378	126	20	635
瑞穂球場	116	18	20	31	2	5	192
名城球場		33	151	1349	70	42	1645
志賀球場		6	29	156	51		242
押切球場		14	24	300	89		427
庄内球場		1	3	51	15	5	75
葵球場		6	18	94	54	4	176
大幸球場			25	137	55	10	227
稲葉地球場			32	217	37		286
六反球場			96	157	33	8	294
松葉球場	6	7	1	118	23	20	175
道徳球場	2	1	18	75	121	2	219
呼続球場	1	7	17	155	64	2	246
港陽球場			27	71	51	1	150
港北球場	4	2	31	141	59	10	247
計	250	117	576	3506	866	144	5459
%	4.6	2.1	10.6	64.2	15.9	2.5	

(註) 「その他」は上記の分類に入れ難いもの

6. 利用機関別による休日、平日の平均利用率について

各利用機関別にみた日曜・祭日並びに平日における野球場の平均利用率は、表6—A、表6—Bの如くである。

これを「連盟或は協会」の利用状況からみるに、平日における全日の利用率は48%であるのに対し、日曜・祭日におけるそれは84.7%で極めて高くなっている。このことは、野球場が協会並びに連盟によつて、年間を通じて計画されている各種の公式試合を消化するために利用されていることによるものと思われる。

次いで「教育機関」では、他の利用機関に比して、年間の利用回数は少く、一般的な問題として取り上げることはできないかもしれ

ないが、それにしても、日曜・祭日よりも平日における利用の多いことが目につく。このような傾向は学生にとって当然日常の学習活動を阻害する要因となるものであり、教育的な立場から問題として取り上げることが必要であろう。

「官公庁」の場合には、平日利用が圧倒的に多い。特に、平日の午後が94.8%と高い利用率を示している。これを表6—Bでみてみるに就労時間内の利用が82.1%を占めている。

このことは官公庁でかなり頻繁に野球が行われていることを示すものであり、官公庁における野球のあり方を問題として取り上げ、再検討してみる必要があるであろう。

また、「事業所」についてみるに、日曜・祭日における利用は、平日に比較して多く、休日を利用しての野球が相当活潑に行われていることが窺われる。だが、他面において、平日、特に午前、午後の就労時間内の利用も多く、官公庁にみられたような問題点が、この事業所においても同様指摘されるのではないかと思われる。

更に、「クラブ」については、平日の午後における利用率が高くなつており、前記の各利用機関にみられたような問題はあろう。しかしながら、日曜・祭日における利用率をみると、いずれも100%以上であり、その意味では好ましい傾向と思われる。

「その他」については平日に比して、日曜・祭日の利用率が高く、比較的問題となるところが少いように思われる。

7. 事業所を中心とした野球場利用の実態について

すでに表5で明らかにされたように、事業所の野球場利用の回数が、年間の総利用回数の過半数を占めているということ。また、事業所が業種や規模において、極めて多様化しているということなどの点を考慮して、特に事業所に視点をしぼつて、より深く考察を進めて行くことにした。

表 6-A 利用機関別による休日・平日の平均利用率

利用機関	日 曜 ・ 祭 日			平 日		
	午 前	午 後	全 日	午 前	午 後	全 日
連盟或は協 会	0回 (0%)	10回 (16.9%)	50回 (84.7%)	0回 (0%)	43回 (14.1%)	147回 (48.0%)
教育機関	2 (3.4)	3 (5.1)	9 (15.3)	39 (12.7)	45 (14.7)	19 (6.2)
官 公 庁	3 (5.1)	12 (20.3)	27 (45.8)	65 (21.2)	290 (94.8)	179 (58.4)
事 業 所	255 (432.2)	299 (506.8)	234 (396.6)	801 (261.8)	1745 (570.3)	172 (56.2)
ク ラ ブ	124 (210.2)	113 (191.5)	81 (137.3)	194 (63.4)	293 (95.8)	61 (19.9)
そ の 他	9 (15.3)	30 (50.8)	27 (45.8)	13 (4.2)	32 (10.5)	33 (10.8)

(註) 平均利用率は下記の数式により算出した

日曜・祭日については $\frac{\text{利用回数}}{59(\text{日})} \times 100$ 平 日については $\frac{\text{利用回数}}{306(\text{日})} \times 100$

表 6-B 平日午後における機関別

野 球 場 利 用 の 状 況

利用機関	利用回数 及 び その割合	学業或は就 労時間内の 野球場利用 回数及びそ の割合	学業或は就 労時間外の 野球場利用 回数及びそ の割合
連盟或は協 会	43回 (100%)	35 (81.4)	8 (18.6)
教育機関	45回 (100%)	40 (88.9)	5 (11.1)
官 公 庁	290回 (100%)	238 (82.1)	52 (17.9)
事 業 所	1745回 (100%)	1641 (94)	104 (6)
ク ラ ブ	293回 (100%)	281 (96)	12 (4)
そ の 他	32回 (100%)	15 (46.9)	17 (53.1)

(註) ここで学業或は就労時間外の野球場利用とは平日の午後5時以後からの利用の場合を意味する。ただし、土曜日については、「連盟或は協会」のうちで、学生団体が利用した場合「教育機関」並びに「官公庁」が利用した場合については午後1時以後からの利用の場合をも意味する。

A 業種分類による事業所数

野球場利用の全事業所を、建設業、製造業、商業（卸業、小売業）、金融業、サービス業（対個人、対事業所、興業娯楽などを含む）、運輸通信業、電力・ガス・水道業に分類し、その野球場利用の状況をみると、表7のように、製造業が最も多く、全事業所の49.7%を占めている。次いで多いのが商業で23.4%である。他業種は、いずれも10%にみたく少ない。

表 7 業種分類による事業所数

業 種	事業所数	全事業所に対する割合
建 設 業	13	1.8%
製 造 業	357	49.7
商 業	168	23.4
金 融 業	45	6.3
サ ー ビ ス 業	70	9.7
運 輸 通 信 業	64	8.9
電力・ガス・水道業	2	0.3
計	719	100

表 8 事業所の野球場利用状況

利用回数	同一球場		多球場		総 計			
	事業所数	延利用回数	事業所数	延利用回数	事業所数	割合	利用回数	割合
1回	317	317回			317	44.1%	317回	9.0%
2	99	198	34	68回	133	18.5	266	7.6
3	31	93	29	87	60	8.3	180	5.1
4	17	68	18	72	35	4.9	150	4.3
5	12	60	24	120	36	5.0	180	5.1
6	11	66	11	66	22	3.1	132	3.8
7	5	35	10	70	15	2.1	105	3.0
8	2	16	5	40	7	1.0	56	1.6
9	3	27	3	27	6	0.8	54	1.5
10	3	30	4	40	7	1.0	70	2.0
11以上	32	743	49	1263	81	11.3	1996	56.9
計	532	1653	187	1853	719	100	3506	100

〔註〕 同一球場とは年間を通じて1野球場のみを利用する場合を、多球場とは2カ所以上の野球場を利用する場合をそれぞれ意味する。

B 事業所の野球場利用状況

全事業所を年間を通じて、同一野球場のみを利用した事業所と、2カ所以上の野球場を利用した事業所に分類してみると、表8のように、前者は532事業所に対し、後者は187事業所である。

次に利用回数からみた事業所数では、年間利用がただ1回のみの事業所が全事業所の44.1%を占めていて断然多く、次いで、2回利用の事業所が18.5%である。

なお、表には示されていないが、6事業所が50回以上利用しており、うち3事業所が100回以上も利用している。

C 規模別分類による野球場利用回数

規模別分類の基準としたのは資本金であり、名古屋商工銘鑑（昭和36年度版）により、資本金1000万円以上の事業所を大事業所とし、1000万円以下のそれを中小事業所として分類した。

以上の分類による大事業所と中小事業所に

表 9 規模別分類による野球場利用回数

利用回数	全事業所数	全事業所に対する割合	大事業所数	全事業所に対する割合	中小事業所数	全事業所に対する割合
1回	317	44.1%	88	12.2%	229	31.8%
2～5	264	36.7	100	13.9	164	22.8
6～10	57	7.9	29	4.0	28	3.9
11～15	28	3.9	18	2.5	10	1.4
16～20	18	2.5	12	1.7	6	0.8
21～30	20	2.8	13	1.8	7	1.0
31以上	15	2.1	13	1.8	2	0.3
計	719 (100%)		273 (38%)		446 (62%)	

ついて、その野球場利用の状況をみてみるに、表9の如く、大事業所の野球場利用は全事業所の38%であるのに対して、中小事業所のそれは、全事業所の62%を占めていて多い。

更に、これを詳細にみると、大事業所では、年間を通じて1回のみの野球場利用が全事業所の12.2%、2~5回利用が13.9%である。

これに対して、中小事業所では、1回のみの野球場利用が全事業所の31.8%を占めて最も多く、次いで2~5回利用が22.8%である。

他方、6回以上利用の事業所についてみると、中小事業所に比して大事業所の方が多くなっている。

以上のことから、大事業所では比較的利用度の高い事業所が多いのに対して、中小事業所では利用度の低い事業所が圧倒的に多いことが明らかである。

D 事業所の利用野球場数について

事業所が年間を通じて利用している野球場数は表10—Aのように、1カ所から7カ所にわたっている。

表 10—A 事業所の利用野球場数

利用野球場数	事業所数	全事業所に対する割合
1 球 場	532	74.0%
2 〃	119	16.6
3 〃	43	6.0
4 〃	18	2.5
5 〃	4	0.6
6 〃	1	0.1
7 〃	2	0.3
計	719	100

なかでも、1カ所のみを利用している事業所が532(74%)で断然多く、次いで2カ所の119(16.6%)である。特に、5カ所以上利用している事業所が合計7カ所ある。

E 規模別分類による多球場利用の状況について

規模別分類による多球場利用の状況をみてみるに、表10—Bの如く、年間を通じて2カ

表 10—B 規模別分類による多球場利用の状況

利用野球場数	大 事 業 所 数	全大事業所に対する割合	中小事業所数	全中小事業所に対する割合
2 球 場	64	53.3%	55	82.1%
3 〃	34	28.3	9	13.4
4 〃	15	12.5	3	4.5
5 〃	4	3.3		
6 〃	1	0.8		
7 〃	2	1.7		
計	120	63.4	67	36.6

所以上利用している大事業所は63.4%であるのに対して、中小事業所は36.6%である。

なお、最も多く利用している野球場数は中小事業所では4カ所にすぎないのに対して、大事業所では7カ所である。従つて、大事業所の多球場利用が中小事業所に比して、はるかに多くなっている。

5. 結 び

われわれは、昭和35年度の名古屋市における社会体育施設としての公共野球場の利用実態について調査を実施し、一応その結果をまとめて報告することができる段階に到達した。

いうまでもなく、このような調査の直接的な動機となつたものは、現代の重要な課題となつている国民の体育を発展させて行く方向に、公共野球場とその利用主体が、どのように位置づけられて行つているのかということ を明らかにすることであつた。

だが、調査結果からすると、国民全体の体育を志向する方向には未だ路遠く、今後なお解決されねばならないいくつかの問題点が残されていることが明らかとなつた。

以下そのような問題点を具体的に列挙すると共に、それに対する方策を検討して行きたい。

今日野球は広く市民の各階層に浸透していて、日常的に最も愛好されているスポーツの一つである。しかしながら、現在名古屋市内

に設置されている公共野球場は、その絶対数が不足しているために、しばしば野球場利用希望者の要求を充足することができないような現状にある。このような事情から、今後各区域毎に最低1カ所以上の野球場が適正配置されることが望ましい。そのためには、名古屋市及び愛知県は地方自治体行政における市民の福祉問題として、この野球場問題を取り上げ、積極的に解決して行く努力を払うことが必要である。その意味から、名古屋市及び愛知県が、この問題を今後展開して行く都市計画の中に、どのように織り込んで行くかが、最も注目される場所である。

同時に、このことと並行して、市民誰もが手軽に野球を実施することができるように、学校の運動場が従来以上に広く開放されて行くという措置も、今後より一層促進されなければならないだろう。そのためには、学校管理者の運動場開放に対する理解と積極的な協力をうることが必要である。

また、野球場の利用日時からすれば圧倒的に平日が多くなっている。このことが当然利用主体である学生や労働者の学業や労働を阻害する原因となつているものと考えられる。この点については、野球場の設置問題も絡んでくることであり、一面的に言及することは出来ないが、利用主体の側においても出来るだけ日曜・祭日に野球場を利用するような積極的な姿勢を打ち出して行くことが必要である。

次に各利用機関別の野球場利用については、事業所が圧倒的に多く、それを規模別にみれば年間の利用回数が多くなるにつれて、中小事業所の数が少くなり、大事業所の数は多くなっている。しかも大事業所における利用形

態は、PR活動の一環としての野球クラブが中心となっており、必ずしも全従業員を対象としたものとはなっていないのが現状のようである。従つて、大事業所で考慮されなければならない点は、事業所自体の利害にとらわれて、野球クラブに優先的な活動の機会を与えるとすることよりも、ひろく従業員を対象とした活動の機会を提供する方向にもつて行くことであろう。

一方、中小事業所においては、事業所の規模、労働時間、労働賃金、福利厚生等の諸条件がすべて大事業所に比して劣っており、このことは従業員が野球を実施して行く上に、種々の制約を受けているものと考えられる。

従つて、このような制約を克服して行くためには、それぞれの中小事業所において、労働条件の改善がなされなければならないことはいうまでもない。しかしながら、基本的には中小企業に対する国家的な政治、経済政策が確立されて行かなければ、上記のような諸条件は到底改善されることは出来ないであろう。

以上のように、名古屋市内に設置されている公共野球場をめぐる行政的な問題や利用主体の側の条件が実質的に解決されなければ、野球が市民全体の体育にまで高められて行くことは無理であろう。

そのためには、この問題を市民一人一人が、自己の健康な生活を維持し、より向上させて行くという自觉の上に立つて正しく受けとめ、それを積極的に解決して行くことが必要である。

そして、このような姿勢こそが、国民の手で国民の体育を創造して行く、最も基本的な条件となるのである。

jump).

The reliability and validity were proved to be very high with the tetrachoric correlation, internal consistency, and product moment correlation. Furthermore, it was proved that this index could distinguish the more skilled and able group from the less skilled and less able group.

A report of survey concerning to the states of the uses of
public sports facilities in Nagoya City
—— Especially, on the public base-ball grounds ——

By

Y. Hayakawa ; Nanzan University

H. Kaga ; Japan Social Welfare College

Recently, it is recognized that a trend to encourage sports to all men's sports is emerging. But necessarily, it seems to be not encouraged to a practical movement.

How does such a trend concerning to sports emerge in Nagoya city?

Retried to clear up on this point by analyzing of the states of public sports facilities and the uses of them in Nagoya City. And we pointed out how problems we must resolve to encourage sports to all men's sports in Nagoya City.